福島大学
地域未来
デザインセンター

相双地域支援
サテライト

相双の風

Vol. 39
2024年9月号

「相双の風」は、被災地域の今と、福島大学地域未来デザインセンター相双地域支援サテライトの取り組みを紹介するニュースレターです。
相双地域支援サテライトは被災地と福島大学をつなぐ現地拠点として、被災地域復興に向けた支援活動を行っています。

TOPICS ｜ トピックス

草野心平しのび朗読や神楽
川内村で「天山祭り」

心平をしのび、天山文庫の前で輪になって踊る人たち

カエルの詩人として知られる草野心平（1903〜88年）の蔵書を収める川内村の天山文庫で7月13日、村で多くの日々を過ごした心平をしのぶ第59回「天山祭り」が開かれ、村民や各地のファンら140人が訪れました。

心平が1953（昭和28）年に同村でモリアオガエルのすむ平伏沼（へぶす）を訪れたのが親交のきっかけ。祭りは同文庫が落成した66（同41）年、名誉村民の心平を囲んで酒を酌み交わしながら歌や踊りに興じたのが始まりで、心平の没後も毎年休みなく続けられてきました。

当日は緑濃い林間に立つ同文庫の前庭で、心平の遺影を前に村立川内小中学園の6、7年生9人が1人ずつ日頃の思いを託した自作の詩を披露。心平や中原中也らが創刊した雑誌「歴程」の同人たちもカエルの死を悼んだ心平の作品「るるる葬送」を朗読しました。また、巫女装束に身を包んだ女子児童4人が村の神社に伝わる神楽「浦安の舞」を踊りました。

本学の協働プロジェクト学修⑨「大熊町と川内村での歴史と災害の記憶の継承」では、心平と村民の交流について証言集を作成する計画で、祭り当日は受講している大学生たちが運営ボランティアに勤しみました。

地域と歩む
福大

被災地で聴いて奏でる音楽体験
人間発達文化学類　芸術・表現コース

▶ 中畑 淳 教授

▶ 今年8月に川内村で行われたコンサートでフルートの音色を間近で感じる児童ら

福島大学人間発達文化学類芸術・表現コース（音楽科）の中畑淳教授と学生有志は、被災地域の中学校や放課後子ども教室で音楽コンサートを行っています。生の演奏を聴きたいという地域の要望を受けたことをきっかけに始まり、2022年度から現在までに、楢葉町と双葉町、川内村で計6回開催しています。

当初は音楽科教授らの主導で進んでいた演奏会ですが、大学生が企画立案に積極的に参加するようになり、現在では主体的にプログラムを構成してくれています。子どもたちにとってポピュラーな楽曲の演奏、世界の珍しい楽器の演奏体験など、聴く側も演奏者も「会場のみんなで楽しむ」参加型コンサートへと内容が変化してきました。

出演した学生からは「参加できてよかった。今後も積極的に関わりたい」という好意的な声が上がっており、子どもたち・学生双方のアクティブラーニング（文部科学省提唱の主体的・対話的な深い学び）としても非常に良い形になってきました。中畑教授は「今後は音楽科だけでなく、美術科をはじめ異なる科の学生の協力も得ながら内容のさらなる充実を図り、次年度以降もコンサート事業を継続したい」と話しています。

相双地域支援サテライトの活動

地域復興支援

▲ 交流会には北幾世橋地区住民15人が集った
▶ モルックを楽しむ参加者

新スポーツ「モルック」で交流
浪江町北幾世橋地区

相双地域支援サテライトは8月31日、浪江町北幾世橋地区の初発（しょはつ）神社で「お茶っこ交流会」を開催しました。住民15人が参加し、ゲーム形式の自己紹介やニュースポーツなどを通して親睦を深めました。

会場となった初発神社の社務所は昨冬に改修工事が終了し、今回は地域住民が集まる初めての機会となりました。交流会はまず、田村友正宮司が神社の由緒や地域に伝わる幾世橋神楽について解説、住民からは「懐かしい」という声が聞かれました。

後半は浜通りでも知名度が上がっているニュースポーツで、短い棒を投げてピンを倒す「モルック」を全員で楽しみました。浪江町で新たに立ち上がったモルックサークルの人たちに室内でも楽しめる段ボール素材のモルックを準備してもらいました。ほとんどの人が初めてのプレイでしたが、スーパーショットが連発し、白熱した試合展開になりました。これを機に町内で定期的に行われているモルック練習会にも参加してみたいという人もいて、すっかりその魅力に取りつかれた様子でした。

本サテライトは今後も住民の皆様との交流を重ねながら、地域コミュニティづくりに貢献していきます。

▲ 大人気だった小川での水遊び
▶ いわなの郷で野遊びに興じる親子ら

夏、親子で川内の自然と遊ぶ
いわなの郷で「冒険ひろば」

川内村の観光施設「いわなの郷」で7月13日、幼児や児童らが福島の豊かな自然に親しんで遊ぶ「子どもの冒険ひろば」が開催され、双葉郡や南相馬市、いわき市から約30人の親子が参加しました。虫取りや野遊び、ボール遊びなど、それぞれが自由に好きな遊びをしながら楽しく過ごしました。

福島県内の自然体験8団体でつくる「子どもが自然と遊ぶ楽校ネット」の主催。このイベントは県内各地で年間100回以上開催されており、双葉郡内では「いわき・双葉の子育て応援コミュニティcotohana（コトハナ）」が協力し、今年度は相双地域支援サテライトも運営に携わっています。

当日は敷地内を流れる小川での水遊びが大人気で、子どもたちはずぶ濡れになりながら生き物探しをしたり、水鉄砲で遊んだりしていました。いわき市から来場した家族は「昨年も参加し、とても楽しかったので今年も来た。自然の中で思いっきり遊べる貴重な場です」と感想を述べました。

今年度の双葉郡内での冒険ひろばはあと1回、10月14日（月・祝）に浪江町丈六公園での開催を予定しています。

お知らせ　11月、「楽ワザ介護セミナーin楢葉町」を開催します

相双地域支援サテライトは昨年度に引き続き、「楽ワザ介護セミナーin楢葉町　福祉とまちづくり〜ともに生きる地域をつくる〜」を楢葉町で開催します。後日、ホームページなどで詳細をお伝えしますので、ぜひご参加ください。

■日時 2024年11月18日（月）午後1時
■会場 みんなの交流館ならはCANvas
（双葉郡楢葉町大字北田字中満260）
■講師 ケア・プロデュースRX組代表　青山幸広氏

▶ 昨年11月に楢葉町で開かれた「楽ワザ介護セミナー」

相双の風 vol.39
2024年9月発行

発行／福島大学地域未来デザインセンター
相双地域支援サテライト
〒960-1296 福島市金谷川1

〔金谷川キャンパス〕TEL：024-504-2834
〔富岡サテライト〕TEL：0240-23-6675
〔浪江サテライト〕TEL：0240-23-5970
https://satellite.net.fukushima-u.ac.jp/

特集

地域学校協働の最前線は今

川内村、楢葉町のコミュニティ・スクール

保護者や地域住民が積極的に学校運営に参画し、教育機関を核とした魅力ある地域づくりを目指す文部科学省推進のコミュニティ・スクール*（学校運営協議会制度）。原発事故の被災12市町村では、田村市と川俣町、広野町、楢葉町、川内村、飯舘村の6市町村が同制度を導入しています。ここでは、川内村と楢葉町で地域学校協働活動の最前線に立つ教育関係者2人のインタビューと、両町村の取り組み事例を紹介します。

川内村　地域文化伝承教室コミュニティハウスにじいろ責任者 谷信孝さんに聞く

▶「村の歴史や伝統芸能継承の役割も果たしたい」と話す谷さん（コミュニティハウスにじいろで）

多世代交流施設で活動実践 伝統芸能伝える場にも

川内村では2004年にそれまであった三つの小学校を合併し、川内小学校を新設しました。震災後、全村避難と帰還を経て、21年に川内小学校と川内中学校を統合した義務教育学校「川内小中学園」を設立。同年からコミュニティ・スクール（CS）をスタートさせ「地域を巻き込んで川内っ子を育てる」ことを目標に、10年先を見据えた地域学校協働活動を展開しています。

学校運営協議会の委員は、中田スウラ先生（福島大名誉教授）を座長とし、保護者会長を含む教育関係者のほか、女性団体会長や商工会長、行政区長、村営塾、放課後児童クラブの委託会社など、様々な立場の方が参加し、意見を出し合っています。また、地域学校協働本部はCSと同じメンバーで構成されており、その活動の中核となっているのが多世代交流施設の川内村地域文化伝承教室です。「コミュニティハウスにじいろ」の愛称で親しまれ、村民はもちろん誰もが気軽に利用できる憩いの場として、現在では年間のべ2,400人ほどが来場します。

にじいろは当時、秋元正・前教育長がCSの目玉となるようにと発案し、川内小中学園内に作られました。室内にはセルフ給茶機や書籍、ピアノがあり、子どもも大人も自由に利用することができます。平日のみならず土日も午前9時から午後5時まで開館しているので、地域の方々の習い事のほか、グループ活動などの会議の場としても需要があり、そこに訪れた人が自分たちの活動の合間に子どもたちと交流する機会も自然に創出してくれます。

また、学校の先生方が総合学習などの相談に訪れ、村から委嘱を受けた地域学校協働活動推進委員のメンバーがそのニーズにマッチした講師や施設を探し、コーディネートをしています。にじいろに職員が駐在することで、教育委員会事務局と教員間の連絡がスムーズになり、学校授業としても地域事業としても「体験活動」の幅が広がり実施回数も増えてきました。新しい体験だけでなく、同時に村の歴史や獅子舞などの伝統芸能を次代に継承していく場としての側面も合わせ、今後も村内外を問わず様々な立場、異なる年齢層の方がより気軽に利用できる空間を目指します。

取り組み　時計組み立てに挑戦　家族ぐるみでにぎやかに

コミュニティハウスにじいろで7月24日、地域学校協働活動事業の一環として、子どもたちを対象に時計を組み立てる体験教室を開催しました。村広報誌で地域住民にも募集をかけたところ、夏休みを利用して川内に帰省した家族も参加するなど、大人と子どもを合わせて50人以上のにぎやかな体験活動となりました。

この時計組み立て教室は日本時計協会と時計メーカー技術者の協力で開催しており、福島大学相双地域支援サテライトが開催場所などをアレンジしています。参加者は置き時計と腕時計の好きな方を選んで組み立てます。特に腕時計の組み立ては小さい部品の取り扱いが難しく、子どもも大人も講師の指導を受けながら真剣に作業に取り組んでいました。

にじいろでは、こうした地域の子どもたちを対象にした事業のほかにも、地元観光協会や商工会などのイベントやセミナー活動も活発で、川内村内外から様々な人々が訪れ、利用しています。

▶腕時計の完成を喜ぶ参加児童

＊コミュニティ・スクールとは

保護者代表や地域住民らでつくる学校運営協議会を設置した公立学校を指し、「学校と地域住民等が力を合わせて学校の運営に取り組むことが可能となる（中略）有効な仕組み」（文部科学省ホームページから）です。制度導入で地域と学校の連携強化や子どもの体験学習の充実などの効果が期待されます。

相双地域支援サテライト
キャラクター そうそうくん

楢葉町　地域学校協働センター長 猿渡智衛さんに聞く

▶地域学校協働センター長の猿渡さん。「価値あるコミュニティをつくっていきたい」という

地域文化復活に子どもら貢献 楢葉愛する人たち巻き込む

楢葉町は震災による原発事故の影響で全町避難を余儀なくされ、住民が離散。その結果、元あった地域コミュニティの多くがなくなりました。2015年から帰還が始まりましたが、楢葉町は地域コミュニティ再生が急務と考え、1年間の準備期間を経て、22年に日本初の「地域学校協働センター」を開設し、学校と地域が連携した協働活動を通じて地域をつくっています。

学校支援を通じたコミュニティの再生に当たっては、もともとの住民、保護者、移住者など多様なメンバーで学校運営協議会を運営し、さまざまな視点から意見を出し合い活動につなげています。徒歩通学の実現や地域学校防災授業、教育パンフレットの発行などが成果として挙げられます。地域との協働活動では、大滝神社の浜下り神事の復活があります。昨年度は総合的な学習の時間に授業として宮司を講師に神事の歴史を学習し、その影響で今年4月の神事には50人ほどの子どもたちが集まりました。

また、センターは開放もしているので、地域の人たちの利用もあり、地域の人と子どもが交流できる貴重な場にもなっています。さらに、これまでの活動を通じて構築したネットワーク機能を発揮して、さまざまな活動のコーディネートも行っています。そのように地域の人たちが活動にたくさん関わってくださっているので、子どもたちにさまざまな体験を提供できているのではないかと感じています。

今後も地域との協働活動として継続するため、楢葉町民のみならず、楢葉に愛着や思いがある多様な人たちと地域を巻き込むつもりです。子どもたちに幼少期から色々な体験をしてもらい、町の魅力を伝え、地域と子どもが力を合わせて住民にとって価値ある地域・コミュニティをつくっていきたいと思っています。

取り組み　遊びも能登地震支援も共に 楢葉の子と福大災害ボラセン

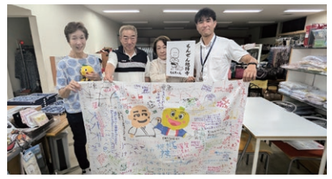
福島大学公式
マスコットキャラクター
めばえちゃん

福島大学の学生団体である災害ボランティアセンターは2022年から、月に1度、楢葉町地域学校協働センターを訪問し、子どもたちと一緒にスポーツや遊びを楽しんでいます。22年7月には楢葉小学校の児童代表と、お互いが仲良く力を合わせる内容の「絆」協定を結んでいます。

夏には、お祭りやキャンプなども福大生と子どもで一緒に行っています。また、防災や災害救援の取り組みでも協働しており、23年には横浜で開催された「ぼうさいこくたい2023」に一緒に出展し、また24年1月に発生した能登半島地震被災地での支援活動でも連携しています。

子どもたちは年長の大学生との触れ合いを楽しみにしてくれていて、浜通りでは見かけることの珍しい「大学生」という存在に触れることによって、子どもたちが自分の将来を考えるロールモデルともなっています。

▶夏祭りを楽しむ楢葉町の子どもたちと福大災害ボラセンの学生



▶地域学校協働センター長の猿渡さん（右端）が福大と連携し、被災地の輪島市門前町・総持寺通り商店街に子どもたちのメッセージを届けた